

自然歴史展示室・三テーマ「くらしの姿」展示替えについて ～市民協働による展示替えの経過～

加藤 隆志

はじめに

当館の常設展示は、天文展示室「宇宙の中のわたしたち」と、自然・人文部門をともに扱う自然歴史展示室「川と台地と人々のくらし」に分かれており(注1)、自然歴史展示室は、「台地の生い立ち」(地質)・「郷土の歴史」(考古・歴史)・「くらしの姿」(民俗)・「人と自然のかかわり」(動物・植物)・「地域の変貌」(地理)の五つのテーマに分かれ、基本的には分野ごとの内容で全体を通してみると通史的な展示になるように配置されている。そして、開館当初は定期的に展示替えを行う計画であったが財政の課題もあり、発掘により得られた新たな資料の入れ替えなど小規模な展示替えが行われた程度で、基本的には開館以来変わっていない。

そうした中で、三テーマ「くらしの姿」は、開館20周年に当たる平成27年(2015)11月に一部の展示替えを行った。この展示替えは担当学芸員である加藤のみならず、市民学芸員有志による検討会議を開催し、そこで展示全般についての検討・企画のほか、実際の展示替え作業も実施して展示替えを完了させた。本稿は、新たな展示内容を中心に紹介するとともに、市民協働で行った今回の展示替えの経過を報告するものである。

従来の「くらしの姿」の内容

まず、当初の三テーマ「くらしの姿」の内容について述べておく(注2)。

「くらしの姿」は、「家の仕事」・「地域と農具」・「技術と農具」の三つの小テーマに分かれる。「家の仕事」は市内南区下溝地区の旧家敷地内に開館直前まで建っていた物置を基本的にはそのまま移築したもので、内部に収納されていた多くの農具を中心とした民具も、移築前にあった場所に忠実に戻して再現することに努めた。かつての畑作や養蚕を中心とした農業での生活ではさまざまな道具が必要であり、さらに道具が置かれている内部の状況からは、当家や地域の農業の移り変わりに伴って多くの道具が蓄積され、保管されてきたことを示すのを狙いとしました。

次の「地域と農具」は「描かれた農具」と「農具と形態」の二つのコーナーからなり、「描かれた農具」は近世

期の農書である「農業全書」や「農具便利論」、あるいは明治後期の神奈川県内数か所の農具の図解と説明が記された「農具一覧並図解」を元に、地域による農具の形態差が、実物とともにこうした絵に描かれた資料によっても分かることを示した。そして、「農具と形態」はもっとも特徴のあった展示で、農具は同じ用途に使われ、一見すると形が同じようでも地域によって少しずつ形態等が異なっていることがあり、そうした点を写真や解説文で表すのではなく、せっかく博物館での展示なのだから実物資料を見ていただきたいということで、数多くの資料を並べて具体的に示そうとしたのであった。農具というと、どのように使用したのかといった用途の展示になり勝ちだが(もとより農具は道具であり、それが悪いということではない)、また違った観点からの農具展示の可能性を探るという意味もあってこのような構成としたのであり、市内を中心に地域によって形態の違いがよく現れる風呂鍬と唐竿(クルリボウ)に絞り、さまざまな鍬71点(そのうち風呂鍬41点)とクルリボウ46点を展示した(注3)。そして、周辺地域を含めた展示のため、当館所蔵の資料以外に周辺の六か所の博物館や資料館、教育委員会から13点の資料を長期借用していたが、借用先の担当職員も退職や異動により変わるなど、借用の経過が分からなくなる恐れが生じており、開館20周年を区切りで借用資料を返却することを意図したことが今回の展示替え作業の直接の契機となった(注4)。

最後の「技術と農具」は、「記録された家の仕事」と「養蚕の技術」の二コーナーで、地域の現金稼ぎとして盛んであった養蚕に焦点を当てる。「記録された家の仕事」は、市内緑区相原地区の旧家に残る農業実践記録や養蚕の飼育記録を取り上げ、すでに近世期から養蚕が盛んに行われていたことや、そうした記録を見ることでかつての養蚕の作業がどのようなものであったのかが分かる点を示した。「養蚕の技術」は、蚕種や桑から始まって蚕が成長して繭を作るまでに使われるいろいろな飼育道具について、飼育技術の改良に伴う道具の移り変わりの様相も含めながら紹介していた。また、ここでは蚕が繭を作るまでに限定し、製糸までは含めていなかった。

展示替え検討会の設置と経過

展示替えに際しては学芸員のみならず、当館の諸活動に係わる市民の会に参加されている方々とともに展示替え検討会を結成して作業を進めていった。現在、当館には市民の会が13団体あり（注5）、例えば筆者の担当の民俗関係でも民俗調査会A・B、水曜会、福の会の四つの会があって、フィールドワークを中心とした活動や資料整理・展示など、神奈川県内の他館と同様に活発な活動を行っている。今回は、基本的に経費は消耗品程度で造作を伴う大掛かりなものではなく、さらに資料も収蔵品を用いるものであるため、現在の「家の仕事」・「地域と農具」・「技術と農具」の構成は変更せず、展示資料及び解説文なども引き続き使用できるものは活用することを前提とし、そうした条件の元でより市民目線からの分かりやすい展示内容とすることを狙いとして、参加者と継続的な検討を行って展示替えを実施することを意図したのであった。

実際の検討会では、基本的には毎年秋に実施している学習資料展の企画や関連事業及び常設展示のクイズラリーの運営等に参画するなど、当館の日常的な諸活動に深い係わりを持っている市民学芸員に呼びかけて結成した。

第1回目の会合は平成26年（2014）3月5日（水）に19名の有志が参加して行われ、三テーマ展示替えの趣旨や今後の進め方について話し合いを持ち、以後、基本的に毎月第一水曜日の午前9時30分～11時に検討会を行うことが決定された。そして、新たな展示替えをするためには、やはり開館以来の展示の内容や狙いについて改めて認識することも必要ということから、4月～7月（第2回～6回・注6）には現状の自然歴史展示室及び三テーマを取り上げて、どうしてそのような展示となっているのかなどの説明や課題の整理を行った。また、参加者が多いことから、三テーマ「くらしの姿」だけでなく、自然歴史展示室全体を検討の週上に乗せることとし、「三テーマ検討班」・「解説パネル検討班」・「クイズ検討班」（注7）というように班別にしてそれぞれ検討を進めていき、正月や祝日の関係で第一水曜日が休館日に当たる時などを除いて基本的に毎月検討会を行っていった。なお、検討会は現在も継続しており、平成28年2月で第22回目を実施している。

「三テーマ検討班」では、再度、三テーマ「くらしの姿」の展示内容と狙いについて確認しながら従来の展示の課題と変更点を整理し、検討に際しては加藤がさまざまな資料や素材をその都度提出し、それに基づきながらメンバーが議論を詰めていった。その結果、27年度に

入った4月からは月一回の検討会では時間が足りないということで、定例的な検討会の前の週にも半日程度の検討日を設け、コーナー別に順番に内容とそれに合致する資料や写真の選定を進め、9月までに全体の骨子を決定した。その後、館内の調整や決裁等の手続きに入り、11月の休館日に3日ほどかけて順番に展示替えを行い、開館20周年に当たる11月20日の数日前の16日（月）に作業を完了した（注8）。

新展示の構成と展示の狙い

（1）造作を伴う大掛かりなものは不可能であるため、基本的に現在の「家の仕事」・「地域と農具」・「技術と農具」の3コーナーの構成は変更せず、展示資料及び解説文なども引き続き使用できるものは活用する。

（2）「家の仕事」の移築物置には、これまで移築直前まで内部にあったものを収納していたが、今後はテーマを定めて内部に資料を展示する。当面は、それに加えて畑作にとって重要であった堆肥作りの諸道具を扱う。また、日を定めて物置内部の公開を行うことを計画し、その際は展示資料を撤収する。

（3）「地域と農具」では、市域が稲作に比べて圧倒的な畑作優越地であることを踏まえ、播種や脱穀調製などの畑作に用いられた農具類を展示に加える。農具の使い方は説明がないと観覧者は分からないが、文字で説明してもよく伝わらないのは同じなので、実際に使用している写真を別に展示する。現在展示している「さまざまな鋤」「ヘラグワの形態差」「クルリボウの形態差」は、このような農具の形態差が示す地域の姿として新しい内容としても重要であり、コーナー全体のテーマとも係わるため引き続き圧縮して展示する。

（4）「技術と農具」では、養蚕の工程を示す道具に加えて、市域では糸取りが盛んに行われてきたことを示すため製糸に用いられる道具類を加える。展示スペースは前述の「さまざまな鋤」「ヘラグワの形態差」「クルリボウの形態差」の圧縮した部分を用い、畑作と同様に使用している写真を加える。また、養蚕が人々の生活に与えた影響や養蚕の信仰に関する展示とともに、組合製糸として大きな規模を有していた市内大島地区の漸進社について、二テーマ「郷土の歴史」にもパネルが展示されているが、製糸工場 で用いられていた実物資料を展示する。さらに、平成22年（2010）で終了した県内最後の養蚕農家が市内にあったことも紹介する。

物置以外の新旧の展示内容の概要は以下の通りである。1～13までの番号は、以下の図に記した展示のステージ番号と対応している。

[地域と農具]

- 1-1 日野市三沢地区にいた鍛冶屋の作った鋏刃 15 点(変更なし)
- 1-2 (旧) 展示なし→(新) 鍛冶屋の作業場・風呂鋏製作写真 2 点
- 2-1 (旧) 近世期の農書に見る農具→(新) かつての市内の土地利用の状況パネル
地図は、『相模原市史民俗編』(平成 22 年刊)の付図を利用する。これは相模原地域のみであり、津久井地域については解説の中で耕地の田畑比に触れる。
- 2-2 (旧) 明治後期の鋏・クルリボウの形態図→(新) 畑作の作業写真 16 点
写真は、昭和 62 年(1987)度製作の文化財記録映画「相模原の畑作」撮影時のものを利用
- 3(旧) さまざまな形態や用途の鋏
→(新) さまざまな形態・用途の鋏(※)
ツミオケ・播種器・土入れなど、畑作の播種や管理の道具
- 4(旧) 風呂鋏の分布と形態差
→(新) 千歯扱き・唐箕・ムシロ・箕・篩など脱穀調製の道具
- 5(旧) 風呂鋏の分布と形態差
→(新) 風呂鋏の分布と形態差(※)
- 6(旧) クルリボウの分布と形態差
→クルリボウの分布と形態差(※)
※ 印は旧展示の一部を圧縮して残した部分で、さまざまな形態・用途の鋏は畑作に用いられるものを主として 31 点から 17 点に、風呂鋏の分布と形態差は市内を中心に周辺地域の広がりを含めて 40 点を 23 点、クルリボウも同様に形態差を考慮して 46 点から 10 点に整理した。
- [技術と農具]**
- 7-1 (旧) 市内相原地区の農業記録→(新) 養蚕作業の写真 16 点
写真は、昭和 58 年(1983)度製作の文化財記録映画「相模原の養蚕」及び昭和 60 年(1985)度製作の文化財記録映画「相模原の機織」撮影時のものを利用
- 7-2 (旧) 明治前期の農業記録にみる養蚕の作業→(新) 住居の改造等、養蚕が生活に与えた影響写真 6 点
写真は、文化財記録映画「相模原の養蚕」撮影時のものを利用
- 8(旧) クルリボウの分布と形態差→(新) 蚕の成長過程模型・種紙・桑の拓本
- 9(旧) クルリボウの分布と形態差→(新) 蚕の飼育道具

- 10(旧) 蚕の飼育道具→(新) 蚕の飼育道具・上族道具
- 11(旧) 蚕の飼育道具→(新) 製糸用具
従来展示していた飼育関係を整理し、座繰りや糸枠・足踏み糸取り機等を加える
- 12(旧) 上族用具→(新) 養蚕信仰・漸進社関係資料
養蚕信仰→金色姫等蚕神の掛軸や神社から出された御札、オキヌサマ人形等
漸進社→繭を煮る鍋、糸を束ねる道具、品評会の盃
- 13(旧) 展示なし→(新) 平成 22 年の市内最後の養蚕パネル

次に、新たな展示を加えた三テーマ全体の内容をより詳しく示すため、各コーナーの解説パネルを従来までのものも含めて記す。番号は上記番号に対応している。なお、実際にはルビが振られているところもあるがここでは省略した。

[家の仕事]**[道具を納める](物置の説明・変更なし)**

かつての相模原には、広大な耕地や山林などが広がり、農作業や養蚕、炭焼きなどが盛んに行われていました。こうした仕事に使われる道具が、どこの家の物置や納屋にもたくさん納められていました。

物置にある道具類は、普段よく使われ手入れの行き届いたものや、片つけられているもの、壊れたままで放置されたものなどさまざまです。

物置の中は一見乱雑に散らかっているように見えますが、よく見ると農具の片づけ方からは、その家の仕事のスタイルが読み取れます。

[堆肥作りの道具](物置内部)

畑地が耕地の大部分を占める地域であった市内では、地力の維持のために畑に入れる堆肥は大切な肥料でした。また、古くは畑に種を播く際に、種と堆肥を混ぜて播くことも行われていたほか、サツマイモの苗を作るための苗床にはたくさんの堆肥が必要とされるなど、農家にとって堆肥作りは大変重要な作業の一つでした。

堆肥の材料の中心はヤマ(雑木林)にある木の落ち葉や草などで、冬場にヤマに行き行って落ち葉などを集めました。その時には大きな籠に何杯も落ち葉を取り、家に運んで堆肥場に積み込み、さらに上下を切り返して発酵を促しました。こうして十分に発酵して、細かくなった堆肥を作ることに努めました。

[地域と農具]**[農具と形態](変更なし)**

農具は、一見同じように見えても、使われる場所や家によって少しずつ形などが違っていることがあります。

例えば、一口に鋤といってもさまざまな種類があり、さらに木製の台に刃をはめ込んだヘラグワは1本1本の形が微妙に異なっています。また、脱穀作業などに用いるクルリボウは、形以外にも使っている木の種類が違っているのがわかります。

これは相模原ばかりでなく、周辺の地域で使われてきた農具と比べるとその違いが一層はっきりします。こうした形や素材の違いなどは、地域の農具のあり方を考えていく上で欠かせない視点です。

【鍛冶屋が作った鋤の刃】（1-2）

かつて農業が生業の中心であったころは、鋤の刃などの刃物類を作る鍛冶屋が各地にあり、市内にも何軒かの鍛冶屋がいたことが分かっています。博物館では、展示の準備として、昭和63年度（1988～89）に市内及び周辺地域を含めた鋤の形態や鍛冶屋についての調査を実施し、その際にさまざまな鋤の製作と記録化も行いました。

ここに展示してある15点の鋤の刃は、東京都日野市で各種の農具や刃物を作っていた露木隆さんが製作したものです（現在は廃業しています）。当時、すでに現役の鍛冶屋は少なくなっており、また、露木さんの作る鋤の構成が相原や橋本地区のものと同様であったことから製作を依頼しました。

【畑作地帯だった相模原】（2-1）

この地図は、『相模原市史民俗編』（平成22年刊）の付図で、明治39年（1906）の相模原地域の土地利用の状況を示したものです。この中で、ピンク色の所は集落があった所、水色は水田ですが、色が付けられていない部分が畑です。当時、集落が少なかったことや山林（緑色）が多かったことに加え、耕地については水田に比べて畑がかなり多かったことがわかります。なお、畑は桑畑の印となっていますが、畑の周囲に桑が植えられていたために一面の桑畑の表示となっていると考えられます。

そして、例えば昭和10年（1935）『神奈川県統計書』では、耕地面積の比率で、相模原地域は水田5%・畑95%、津久井地域が水田5.1%・畑94.9%であり、全体として市内は圧倒的な畑作地帯ということがわかります。

【様々な鋤】（3にそのまま使用）

相模原ではかつて、様々な形の鋤が使われてきました。これらの鋤は、主として畑の耕作作業全般に使われたもの、荒地の開墾や土木作業に使われたものなど、いくつかのグループに分けることができます。

【畑作の道具】（3・4）

畑では、耕起（耕す）・整地（ならして播く所を作る）・播種（種を播く）・管理（麦踏みや草取りなど）・収穫（刈り取り）・脱穀調製（粒を落としたり殻を取る）といった

作業工程がありました。そして、畑で夏と冬に作られる作物に応じてそれぞれの作業があり、いろいろな道具が使われていました。

【鋤の分布】（移動して5に使用）

ヘラグワは相模原の代表的な鋤で、かつては、これ一本あれば田畑の耕作はすべて行うことができたともいわれています。相模原の鋤と周辺各地で使われていた鋤を比べてみると、形の似ているものや異なっているものがあるのに気がつきます。こうしたことはどういう理由で起きるのでしょうか。考えてみるのもおもしろいものです。

【クルリボウ】（移動して6に使用）

麦や豆などを叩くための道具で柄を持って振り回します。回転する棒が肘に当たると大変痛かったようです。相模原では、叩く棒の部分がカシの木の角材でできたものが多く、その一方で杉などの別の木を用いたり、全体の形が異なるものも見られます。どこでも同じと思われるがちな道具ですが、実際にはいろいろなものが使われていました。

【技術と農具】

【養蚕の技術】（移動して8に使用）

相模原の養蚕はすでに江戸時代には行われており、その後もたくさんの蚕が飼われていました。特に、第二次世界大戦前の生糸の輸出が盛んであった時期には、養蚕から得られる現金は、農家にとって生活を支えていくために欠かせないものとなっていました。

養蚕は蚕を育てて繭を作らせ、その繭や生糸を売るものですが、蚕の成長に合わせていくつかの作業があり、多くの道具が用いられます。そして、質の良い繭や糸を得るために、養蚕の技術や道具にはさまざまな改良や工夫が加えられてきました。

【人々のくらしと養蚕】（7-2）

養蚕の進展は人々の生活に大きな影響を与え、それはさまざまな面に及びました。多くの畑に桑が植えられたこともその一つですが、実際には専用の桑畑のほかに、畑の周囲や畑の境木として桑を植えた所が相当ありました。

他にも人が住む住居の中でたくさんの蚕を飼うのは普通のことと、そのために二階を広くしたり、蚕は寒いと成長を止めてしまうために火を燃やす炉を作り、採光や換気を良くするために屋根の破風に大きな開口部を作るなど、住宅を養蚕用に改造することが広く行われました。さらに、桑を入れておくための桑室や繭を乾燥して保管するための蒸倉を作るなど、養蚕用の設備を作ることもありました。

〔蚕の成長と糸繭〕（8）

養蚕を行うのは5月初めから9月末ころまでで、その間に三～四回、蚕を飼いました。最初は種のように小さかった蚕は桑をどんどん食べて成長し、ついに糸を吐いて繭を作ります。農家では、繭のままで出荷したり、生糸に取って売るほか、二匹の蚕で一つの繭を作った玉繭から真綿を作ることも行われていました。

〔蚕種と桑〕（移動して8で使用）

蚕の種（卵）は種紙に産み付けてあります。種紙にはいくつかの種類があり、次第に改良されて移り変わっていきました。

蚕のえさになる桑にもいろいろな種類があります。桑の葉は蚕の成長に合わせて刻む大きさを変えたり、蚕を飼う季節によって桑の取り方が異なったりしました。

〔養蚕の道具〕（移動して9で使用）

蚕は桑の葉を食べて次第に大きくなり、やがて繭を作ります。ここに展示してある道具は、かつて各家で養蚕が行われた当時に使用されていたものの一部です。

棚や火鉢、あるいは籠やいくつかの網など、蚕を飼うにはさまざまな道具が必要であったことがわかります。

〔養蚕の信仰〕（12）

蚕は温度・湿度の管理や病気の問題など、飼育に注意が必要なこともあって、蚕が無事に成長してたくさんの良い繭ができるように、人々は各地の神仏にお参りして祈願しました。市内にもさまざまな蚕の神仏が祀られていて、多くの人々によって信仰されていた所が各地にあり、それは地域内ばかりでなくかなり遠くの範囲からの参詣人を集める場合もありました。

また、講といった集落の中で人々が集まって実施される行事や、正月などに行われる年中行事においても蚕が育ち、繭がよくできるように願うものが行われるなど、さまざまな養蚕にまつわる信仰が見られました。

〔漸進社〕（12）

農家が自家で取った糸を小枠から大枠にからみ返す作業を揚げ返しといい、緑区大島の漸進社はこの作業を共同で行った上で、糸の品質の選別や荷造りして販売することを目的に明治19年（1886）に設立されました。漸進社はその後に大きく発展し、大正初期には、地域での組合組織のものとして、全国四大社（ほかの三社は群馬県）に数えられるほどになりました。このように、養蚕製糸の展開は地域にさまざまな動きをもたらしました。
※ 常設展示・自然歴史展示室の2テーマ「郷土の歴史」の清水家模型奥側の壁やケース内にも漸進社に係わる資料が展示されています。

〔神奈川県内最後の養蚕〕（13）

群馬県の富岡製糸場が世界遺産に登録され、改めて養蚕への関心が高まっていますが、相模原市内もかつては神奈川県内に数々の養蚕地帯でした。

市内の養蚕は江戸時代初～中期には行われ、女性の稼ぎとして年によって変動が大きいものの毎年多くの繭や糸の売り上げがあって貴重な現金の収入源であり、また、安政6年（1859）の横浜開港に伴う生糸貿易は、市内の養蚕製糸にも大きな影響を与えました。

こうした重要な産業であった市内の養蚕も、第二次世界大戦後の高度経済成長期を迎えると下火になっていき、最後まで残っていた神奈川県全体で12軒（そのうち市内は緑区の4軒）の養蚕も平成22年（2010）ですべて終了し、産業としての養蚕はなくなりました。

おわりに

当館のようないわゆる地域博物館の存在意義の一つに、市民自らが博物館と係わる中で、自分たちの生活する場所がどのような地域であるのか、地域の多様な歴史や文化を認識するとともに、地域の将来のあり方について考える資料を作り出していく活動を展開する拠点としての役割があると思われる。筆者は当館において長く民俗分野の学芸員として活動してきたが、一般の市民にとっての民俗の魅力とは何か、何を売りに民俗分野として市民協働を図っていくのかを考えた場合、やはり歴史や文化はかつて学校で習った年表を記憶するようなものではなく、自らの身の回りにも姿を見せているものを改めて発見すること、地域の歴史や文化をバラバラではなく自分たちの生活と係わらせて捉え、それらを掘り起こしていくことが大切であり、そうした視点で地域を考える人々といかにともに活動していけるかというものであった。

実際に当館において、多くの市民の会がさまざまな活動に係わり、今やそうした市民の力なくては館の運営が成り立たなくなっているが、このような市民とともに行う活動を展開していくに当たって留意しているのは、市民の要望やニーズが多様化・多層化している中で、活動自体が筆者自らも含めて楽しく、さらに意義のあるものであり、それを市民とともに行って共有する点にある。そして、作業に当たっての環境を整えながら、さまざまな意味でモチベーションを高めるような動機付けを継続的にを行い、活動が自己満足に終わらずに絶えず自分たちの活動の意味や役割を学芸員のみならず参加者も含めて確認しつつ、実践した成果を公開し蓄積して、次の活動に繋げていくことが重要と捉えている。

本稿で述べてきた市民とともに行った展示替え作業

は、もちろん当館にとっても初めてのことであり、直接的には前述のように長期借用資料の返却がきっかけになっている。しかし、検討の過程では、従来までの展示内容がなぜそうしたものとなっているか、どこに課題があるのかを踏まえた上で、新たな展示はどのようなものを目指すのかを館に対して意見を述べるということではなく、市民目線からきちんと示すという点を踏まえながら進めていった。実際の議論の中ではさまざまな意見や実現したいことなどが出され、それらも尊重したものの金銭面や時間・技術面などで無理なこともあり、できる点とできないことを整理し、さらに参加しているメンバー相互の意見の一致を図るのも当然ながら必要なことであった。結果的には、市域が畑作の卓越地であることから、播種から脱穀調製までの畑作の諸道具や製糸に用いる道具を加えるといった、ある意味でオーソドックスな展示となり、すでに別のコーナーで取り上げている一時期は大きな規模を誇った組合製糸の漸進社について、三テーマでも重複をいとわず新しく収集された資料を展示したことなどは、多分に群馬県の富岡製糸場の世界遺産登録が影響していると思われるのだが、こうしたものが地元にもあったということこそ是非紹介したいといった、市民が検討した今回の取り組みの特徴がよく表れているとすることができるであろう。

現在、各地の博物館ではさまざまな取り組みが行われ、そのことは大変な努力ではあるものもはや活動をやれば良いといった段階は過ぎ去り、内容や質そのものを問われる段階になっている。ただ、多くの博物館での多様で活発な活動が今一つ認知されていないようにも感じられ、ともすれば単発的な内容に陥り勝ちで効果が削がれているようにも見える。これは博物館側の情報発信の問題も大きく、せっかくの活動やそれに伴う意義を訴えるためにも情報のネットワークと共有化、対社会的なアピールが求められている。また、成果を蓄積した中からどのような新たな価値や魅力を生み出せたか、博物館の役割が観光やむらおこし、あるいはまちづくり等にも広がっている中で、先に挙げたような活動を通じて、市民がどのように地域を理解して地域力を高めることに貢献したか、具体的な社会活動を通じたパブリックな面へのコミットの方向性と実際に行われた活動への評価をどう行っていくかが問題となっている。

以上のように、現在の博物館を巡る状況には大きな課題があるが、実際に学芸員として行える活動はわずかなものに過ぎない。それでも地域博物館の学芸員としてできることは何か、各地の学芸員が模索していかなければならないのは当然である。今回の展示替え作業でも、「解

説パネル検討班」や「クイズ検討班」の作業は続いており、本稿で取り上げた「三テーマ検討班」もこの展示替えで終了ではなく、例えばどうしてもスペースの関係から常時扱えない内容について、その都度テーマと期間を決めて、常設展示室の一角に移動ケースや展示パネルを設置して展示を行うことを検討している（注9）。今後ともこのような市民協働による活動や運営の実績を積み上げながら、さまざまな課題に対処していければと考えている。

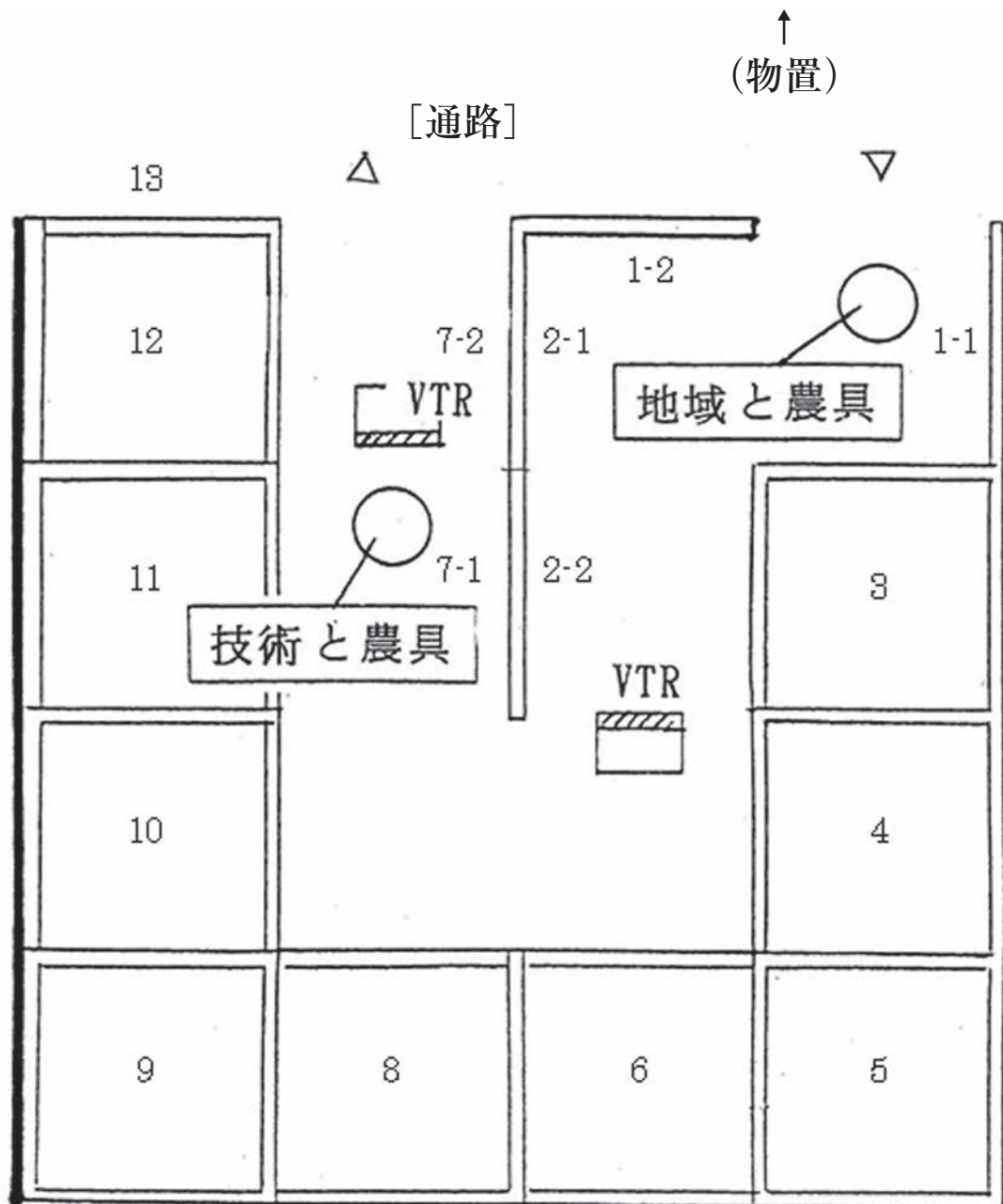
注

- (1) 相模原市は平成18年から19年（2006～07）にかけて旧津久井郡四町（城山町・津久井町・相模湖町・藤野町）を編入しており、地形的には相模野台地のほかに広大な丹沢山地を市域に含むことになった。「川と台地と人々のくらし」は開館当初のテーマである。
- (2) 三テーマの旧展示の詳しい内容については、『相模原市立博物館常設展示解説書』1996を参照。
- (3) 風呂鉞の地域による形態差については、笹原亮二「相模原の鉞一境界のメルクマール（上）・（下）」『民具マンスリー』第21巻8・9号 神奈川大学日本常民文化研究所 1988、クルリボウは、加藤隆志「神奈川県のクルリボウ～その形態・計測値から見た特徴～」『神奈川県民俗調査報告20 農耕習俗と農具（Ⅲ）』神奈川県立歴史博物館 1999、などを参照。
- (4) 内訳は鉞が6点、クルリボウが7点である。なお、開館当初は借用していたが、開館以後の資料収集によって当館所蔵のものに差し替えてすでに返却したクルリボウが2点ある。
- (5) 相模原市協働事業提案制度によって採択された2団体を含む。
- (6) 都合により第6回目に当たる8月分を7月30日に実施した。
- (7) 「解説パネル検討班」は、どうしても解説が難しくなる「郷土の姿」の中世の部分の解説パネルの改訂に取り組み、「クイズ検討班」は自然歴史展示室内に展示に係わるクイズを設置し、展示自体を来館者によく見てもらうことを目的にクイズの作成を行っている。
- (8) 展示替えの作業には検討会のメンバーのほか、数名のお手伝いの方も加わった。展示内容の検討や当日の展示替え作業に当たられた方は、今井良子さん・大野みどりさん・木村文夫さん・草薙 熙さん・進藤芳和さん・田部洋之さん・田巻アイ子さん・横須賀浩子さんである。なお、作業補助のアルバイトと

して小澤葉菜さんも参加した。

(9) 手始めに「最後の養蚕」と関連して県内最後の養蚕の様子
の
写真パネルを展示するほか、「養蚕の信仰」

に係わるその他の御札等の資料など、順次展示する予定となっている。

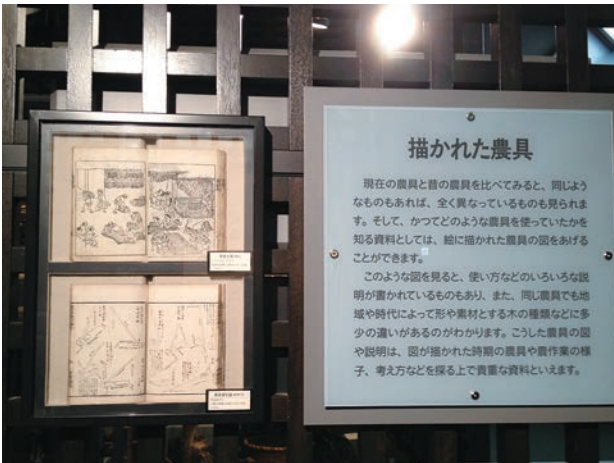




(旧) 物置(内部は本来あった道具のみ)



(新) 物置内部に堆肥作りの道具を展示



(旧 2-1) 近世農書



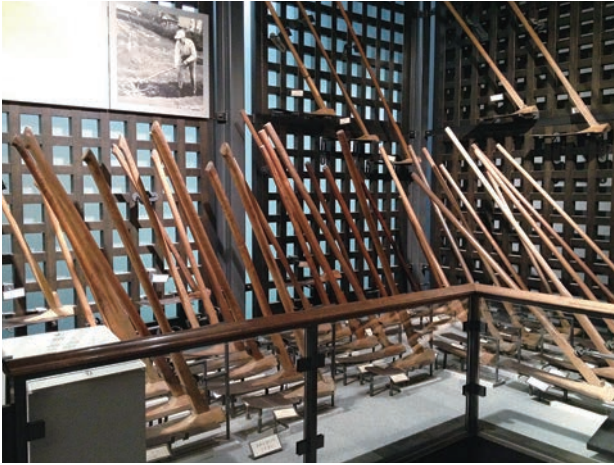
(旧 2-2) 近代農具図



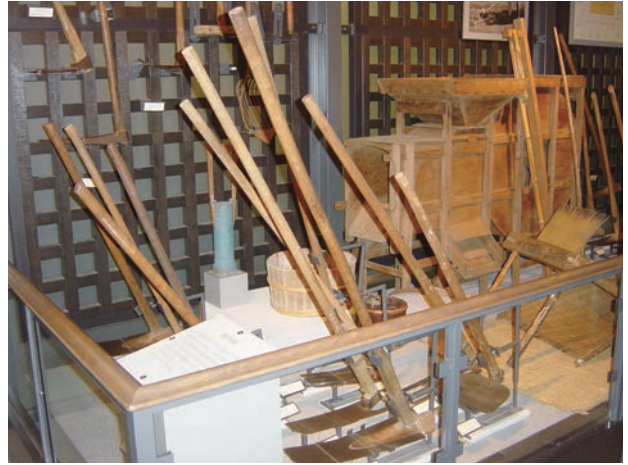
(新 2-1・2) 土地利用図・畑作の作業写真



(旧 3) 多くの鍬類が並んでいた



(旧 4・5) 風呂鍬の形態差を示す



(新 3) 鍬とともに畑作道具を展示した



(新 4) 脱穀調製用具



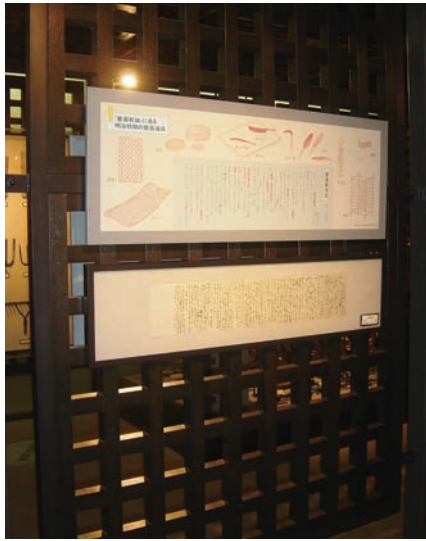
(新 5) 風呂鍬の形態差も縮小して残した



(旧 8) クルリボウも多く並んでいた



(新 6) クルリボウもここだけに縮小した



(旧 7-2) 記録された家の仕事



(新 7-2) 養蚕の作業とくらしに与えた影響



(旧 10 → 新 9) 養蚕関係は整理しつつ展示



(旧 12 → 新 10) 上族関係はそのまま基本的にそのまま移動



(新 8) 蚕の種紙や桑などを整理した



(新 11) 新たに製糸関係を加えた



(新12) 信仰等も加えた



(新13) 最後の養蚕パネル



鍬やクルリボウをはずし、収集場所を確認



たくさん並んだ鍬を撤収するのは大変だった



展示変えも検討会メンバーで行った



解説パネルの設置も実施